

平和の光いく代まで

糸満市立糸満中学校三年 金城 華陽

碧き海にはタマンやグルクンが舞い
陽光を宿す波はまばゆくきらめき
果てなき眺めは胸の奥まで澄みわたる
太陽の恵みをたたえる大地には
サトウキビやゴーヤーが豊かに実り
私たちの暮らしの根を静かに支えている

心育む私たちのふるさと、沖縄

街には陽だまりのような笑顔があふれ
学び舎へと続く道には

「おはよう」と交わす声がやさしくひびく
聞きなれた声は朝の風にとけこみ
友の笑い声は朝の光へやわらかくほどけてく

そんな沖縄で 私は生きている
平和な島で 私は生きている

けれどこの島は
かつて激しい戦火に包まれた
八十一年前
多くの命が曇天の空へ散り
多くの涙が悲しみの海へ沈んでいった
その悲しみの上に 今の静けさがある
その犠牲の上に 今の平和がある

慰霊の日
家族とともに長い階段をのぼる
「島守の塔」のすぐそばの
小さな慰霊碑にそっと手を合わせる
刻まれた祖母のいとこの名を静かに見つめる
祖母の記憶に生きるいとこの面影をたどる
ひっそりとたたずむその姿に
語りつくせぬ祈りの深さを知る

七色の夢を抱き未来へ歩むはずだった命
まぶしい明日を胸に描いていた命
沖縄戦のなかで、帰らぬ命となった
学徒隊に動員され、若き命を散らした

再会を願ひ続けた家族の祈りは
遠いブラジルからこの島へ帰ってきた
待っていたのは、息子のいない現実
骨も、遺品もない
帰らぬ息子を想う父の詩が
コンクリートの慰霊碑に刻まれた

三年にわかれし 君したひ
父ははるばる かえれ共

君はこの世に いでまさず
護国のはなと ちりしとや
父母がたむけし 花束に
花をしたひて 父母にあへ
三つの時にいだきし あのすがた
瞼にうかぶ 今日も又
君がみたまは 諸共に
島を守りて 安らかに
平和の光 とこしへに
守り照せ いく代まで

慰霊碑に刻まれた文字は
長い年月の雨風にさらされ
今では読みにくい
けれど
文字が薄れても
悲しみが消えることはない

祖母はその詩を口ずさみながら
兄妹のように育ったいとこを偲ぶ
涙のなかで、いとこの日々をたどる
会いたい人に、もう会えない
届きたい言葉は、もう届かない
いとこを想う涙が静かに頬をつたう

誰かが生きたかった時間を
私たちは生きている
戦争の悲しみを知る島で
私たちは生きている
この場所で育ったからこそ
この場所で生きているからこそ
強く願う思いがある

誰かが
明日をおそれず 歩いてゆけるよう
誰もが
大切な人と ぬくもりを分かちあえるよう
「もう二度と悲しい争いを繰り返さない！」

「命どう宝」
命を語り継ぐことこそ
平和な未来へつなぐ宝
陽だまりのような笑顔があふれる島で
澄みわたる碧き海を抱く沖縄で
語り続けていく
平和の光が
とこしえに消えぬよう